

令和 3 年 6 月 7 日現在

機関番号：16101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2020

課題番号：16K12296

研究課題名(和文) 児童虐待防止を担う保健師の困難感の解明に基づいた支援能力向上プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of a program to increase support capability based on elucidation of difficulties faced by public health nurses involved in prevention of child abuse

研究代表者

橋本 浩子 (HASHIMOTO, Hiroko)

徳島大学・大学院医歯薬学研究部(医学域)・准教授

研究者番号：80403682

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：全国の保健所、市町村において子ども虐待防止に携わる保健師が抱える困難感に着目し、その構造および関連要因を明らかにするために、質問紙調査を実施した。保健師の困難感として、問題を抱えた親、家族への支援、支援に向けたアセスメントとつなげ方、関係機関との連携、支援を行う保健師としての能力、部署内での協働、虐待を受けた子どもへの支援の6つの因子が抽出された。そして、困難感には保健師の経験年数や役職、研修受講経験、携わった事例数によって異なることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

子ども虐待防止に向けて、子どもや親に寄り添った切れ目のない支援が一層求められるなか、支援に携わる保健師は困難や不安を感じており、保健師への支援の充実は欠かせない。本研究では、保健師の困難感に着目し、その因子構造および関連する要因について明らかにした。困難感の特徴が明らかになったことで、子ども虐待防止に携わる保健師への教育支援に必要な内容が明確となり、現状に即した個別性のある支援に貢献できると考える。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to identify factors influencing the difficulties faced by public health nurses (PHNs) in the prevention of child abuse and to understand the relationship between the personal attributes of PHNs and the difficulties faced by them. A questionnaire survey was administered to PHNs involved in prevention of child abuse in public health centers and municipalities all over Japan. Data collected were analyzed using exploratory factor analysis. Six factors on the difficulties faced by PHNs were extracted and identified as: "support of parents and their families facing problems," "process of assessing the problem and linking to support," "cooperation with relevant organizations," "ability as a PHN to provide support," "collaboration within the workplace," and "support for abused children." These difficulties were related to the PHNs' experience, current work position, training on abuse, and the number of child abuse cases encountered by them.

研究分野：小児看護学

キーワード：子ども虐待防止 保健師 困難感 支援プログラム

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

全国の児童相談所における児童虐待相談対応件数は増加が続いており、子ども虐待防止は社会全体で取り組むべき喫緊の課題となっている。母子保健の国民運動計画である「健やか親子 21 (第2次)」では、「育てにくさを感じる親に寄り添う支援」と「妊娠期からの児童虐待防止対策」が重点的に取り組む課題として掲げられており、子ども虐待の防止に向けて妊娠期からの切れ目のない支援の重要性が高まっている。

子ども虐待防止には様々な専門職が携わっているが、その中でも妊娠の届け時から出産した後も乳幼児健診などで継続して関わる保健師の果たす役割は大きい。保健師が支援を行っていく過程では、親との関係構築、状況に応じた適切な判断、関係機関との連携などが不可欠である。そのため、保健師には子どもの成長・発達に関してだけでなく親の精神面の理解やアセスメント、他職種との連携・調整など幅広い知識、技術が必要とされる。

子ども虐待件数の増加に示されるように、支援を必要とする子どもや親、家族は多く、その背景も複雑で多様化してきている。そうしたなか、支援に携わる保健師は親、家族への関わり、関係機関との連携など様々な場面で困難を感じている。子ども虐待防止に向けた取り組みを進めていくためには、個々の専門職への支援は不可欠であり、各専門職の現状や課題に基づいた支援内容を検討する必要がある。保健師の役割の重要性が増すなか、困難感を抱えた保健師への支援は急務であり、現状に適した支援を実現するためには、困難感の解明に基づいた支援内容を検討する必要がある。

2. 研究の目的

本研究は、子ども虐待防止に携わる保健師が抱える困難感に着目し、その構造および関連する要因について明らかにし、その分析結果をもとに保健師への教育支援プログラムを開発することを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 保健師が感じている困難の把握

国内の文献を対象に文献検討を行い、子ども虐待防止に携わる保健師が感じている困難の内容を抽出した。文献の検索は、医学中央雑誌 Web 版にて、「児童虐待」、「小児」、「子ども」、「虐待」、「保健師」をキーワードに、2000 年～2016 年の原著論文を対象に行った。その結果、115 件の文献が抽出され、そのうちレビュー文献、高齢者虐待に関する文献などは除き、本研究の目的に該当する 12 文献を分析対象とした。分析方法は、文献を精読し保健師の困難について記述されている箇所をデータとして抽出しコードとした。意味内容の類似性と相違性に着目して、コードをサブカテゴリー化、カテゴリー化した。

(2) 保健師の困難感の構造および関連要因の明確化

全国の保健所、市町村に勤務する子ども虐待に携わっている保健師を対象に、郵送法による無記名自記式質問紙調査を実施した。全国保健所長会¹⁾、総務省²⁾のデータをもとに、110 の保健所と 393 の市町村を抽出し、研究協力を依頼した。

調査に用いた質問紙は、文献検討の分析結果をもとに作成した。調査内容は、対象者の性別、年齢、所属機関、保健師経験年数、役職、勤務する自治体人口、所属機関の保健師人数、子ども虐待に関する研修の受講経験、子ども虐待に携わった例数、子ども虐待に関した支援を行ううえで感じる困難の実情に関する 50 項目と、希望する研修内容、子ども虐待に関した支援について

の考えや意見についてであった。困難の実情に関する 50 項目については、4 件法（1：困難を感じない～4：困難を感じる）とした。子ども虐待に関して希望する研修内容、子ども虐待に関する支援についての考えや意見については、それぞれ自由記載で回答を求めた。

分析方法は、対象者の属性および困難感 50 項目について集計し、記述統計を行った。そして、困難感の因子構造を明らかにするために、項目の天井効果と床効果、IT 相関を確認した後、主因子法、プロマックス回転にて因子分析を行った。困難感と対象者の属性との関連は、Mann-Whitney の U 検定、Kruskal-Wallis 検定を行い、Kruskal-Wallis 検定にて有意差があった項目は、多重比較（Bonferroni 法）を行った。希望する研修内容については、内容の類似性に注目して分類を行った。子ども虐待に関する支援についての考えや意見については、保健師が考える課題が記述されている内容を抽出し、コード化した後、内容の類似性と相違性に注目してカテゴリー化した。

本研究は、徳島大学病院医学系研究倫理審査委員会の承認を得て行った。

4．研究成果

（1）文献検討の結果、保健師が感じる困難の内容として、「保健師としての責任」、「部署の体制」、「情報収集」、「子どもの支援」、「家族への関わり、支援」、「関係機関との連携」の 6 つのカテゴリーが抽出された。このうち、「家族への関わり、支援」は最も多くの文献で困難として記述されていた。保健師の経験年数は、5 年以下から 31 年以上まで含まれていた。保健師の困難感に関連する要因について分析した文献は、1 件であった。

（2）研究協力への承諾が得られた 144 施設に所属する保健師 447 名へ質問紙を配布し、337 名より返信が得られた（回収率：75.4%）。

子ども虐待防止に携わる保健師の困難感の因子構造を明らかにするために、子ども虐待に携わった経験があり、質問紙の困難感に関する 50 項目に欠損がない 250 名の回答について因子分析を行った。分析対象者の平均年齢は、40.1 ± 9.9 歳、所属機関は市町村（保健センター）が 158 名（63.2%）で最も多かった。

子ども虐待防止に携わる保健師の困難感として、6 つの因子が抽出された。第 1 因子は、“親へ養育行動が改善するように支援すること”、“サポートが得られていない親の家族関係を調整すること”など 11 項目から構成され、＜問題を抱えた親、家族への支援＞と命名した。第 2 因子は、“虐待の支援の必要性を判断すること”、“気になる親を見つけた時の支援へのつなげ方”など 11 項目から構成され、＜支援に向けたアセスメントとつなげ方＞と命名した。第 3 因子は、“連携に際して関係機関の協力を得ること”、“関係機関との連携の進め方”など 5 項目から構成され、＜関係機関との連携＞と命名した。第 4 因子は、“虐待の支援に関する知識が不足していること”、“虐待の支援に関する技術が未熟であること”など 4 項目から構成され、＜支援を行う保健師としての能力＞と命名した。第 5 因子は、“所属部署内の職員間で事例について話し合うが意見がまとまらないこと”、“所属部署内の職員間で事例について話し合う機会が不足していること”など 4 項目から構成され、＜部署内での協働＞と命名した。第 6 因子は、“虐待を受けた子どもを継続して支援すること”、“虐待を受けた子どもへの関わり方”など 3 項目から構成され、＜虐待を受けた子どもへの支援＞と命名した。保健師は支援を行う過程で様々な困難を感じており、そこには子どもや親、家族の状況をいち早く把握し関係する機関と連携しながら継続して支援するという保健師の役割が反映されていた。

各因子を構成する項目の平均得点は、対象者全体では、＜問題を抱えた親、家族への支援＞が 3.21 ± 0.55 で最も高かった。次いで＜虐待を受けた子どもへの支援＞、＜支援を行う保健師としての能力＞、＜支援に向けたアセスメントとつなげ方＞、＜関係機関との連携＞、＜部署内での協働＞の順であった。しかし、保健師経験年数に着目してみると、1-5年目は＜支援を行う保健師としての能力＞が最も高く、次いで、＜問題を抱えた親、家族への支援＞、＜虐待を受けた子どもへの支援＞の順となっており、保健師としての経験年数が少ない場合には、＜支援を行う保健師としての能力＞に、より困難を感じている傾向にあった。

困難感の各因子の項目の合計得点を用いて、保健師の困難感と属性との関連について分析した。その結果、＜問題を抱えた親、家族への支援＞、＜支援に向けたアセスメントとつなげ方＞、＜関係機関との連携＞、＜支援を行う保健師としての能力＞、＜虐待を受けた子どもへの支援＞の5つの因子で属性との関連が示された。＜問題を抱えた親、家族への支援＞と＜虐待を受けた子どもへの支援＞は、保健師経験年数、虐待に関する研修受講経験 ($p < 0.01$)、携わった虐待の事例数 ($p < 0.001$) によってそれぞれ有意差があり、保健師経験年数が少ない群、研修受講経験がない群、携わった事例数が少ない群が困難感が高かった。＜支援に向けたアセスメントとつなげ方＞と＜支援を行う保健師としての能力＞は、保健師経験年数、虐待に関する研修受講経験、携わった虐待の事例数、役職によって有意差があり ($p < 0.001$)、保健師経験年数が少ない群、研修受講経験がない群、携わった事例数が少ない群、役職のない群が困難感が高かった。＜関係機関との連携＞は、保健師経験年数 ($p < 0.001$) と虐待に関する研修受講経験、役職 ($p < 0.01$) によってそれぞれ有意差があり、保健師経験年数が少ない群、研修受講経験がない群、役職のない群が困難感が高かった。保健師は様々な困難を感じているが、すべての保健師が同じように感じているわけではなく、保健師経験年数、役職、虐待に関する研修受講経験、携わった虐待の事例数によって困難感の程度は異なることが示された。

子ども虐待防止に携わる保健師が希望する研修内容として、回答が最も多かったものは「親への関わり方・支援」であった。具体的内容としては、精神疾患や発達障害、被虐待歴などを抱える親への支援、支援を拒否する親への関わり方についてなどであった。次に多かったのは「事例検討」であり、うまくいった事例や困難事例の紹介・対応方法などであった。その他の内容は、「保健師としての役割・対応」、「関係機関との連携」、「リスク要因および緊急度のアセスメント」、「虐待を受けた子どもへの関わり方・支援」、「虐待支援に必要な知識」、「法・社会制度」、「家族へのかかわり方・支援」、「虐待が子どもに及ぼす影響」、「虐待予防対策」、「支援する側への支援」、「その他」であった。この中で、「保健師としての役割・対応」には、虐待の通告を受けた時の保健師としての初期対応や虐待予防について母子保健からできることについてなど、「虐待支援に必要な知識」には、経済的問題との関連や性的虐待についてなど、「虐待が子どもに及ぼす影響」には、虐待が脳や発達などに及ぼす影響や虐待を受けた子どもの心理についてなどがあつた。

子ども虐待防止に携わる保健師が認識する課題として、【支援していくために必要な体制の整備】、【支援者を支える体制づくり】、【人的配置の充実】、【関係機関との連携】の4つのカテゴリーが抽出された。【支援者を支える体制づくり】では、保健師は支援する側へのサポートや協力体制、スーパーバイズが得られる機会を求めている。

本研究で明らかとなった困難感の 6 つの因子<問題を抱えた親、家族への支援>、<支援に向けたアセスメントとつなげ方>、<関係機関との連携>、<支援を行う保健師としての能力>、<部署内の協働>、<虐待を受けた子どもへの支援>は、子ども虐待防止に携わる保健師の役割や支援の過程を反映したものであり、保健師への教育支援プログラムに必要な内容であると考えられる。保健師の困難感は、経験年数、役職、研修受講経験、携わった事例数によって異なっているため、効果的なプログラムの実現には個々の困難感の特徴を理解したうえで内容を精選していくことが重要である。特に、経験年数が少ない保健師は<支援を行う保健師としての能力>に困難を感じているため、一つ一つの経験を通しての学びを積み重ねられるような支援が必要となる。研修希望として回答が多かった事例検討は、子どもや親、家族への支援の実際や支援に向けたアセスメント、関係機関との連携など、保健師が支援に携わるうえで必要な過程を実践的に学ぶことができ有用であるため、十分に活用できる方法を検討する必要がある。こうした内容に加えて、教育支援プログラムには保健師が安心して継続的にスーパーバイズを得られるような体制づくりが不可欠である。

引用文献

- 1) 全国保健所長会 (2017). 保健所一覧. <http://www.phcd.jp/03/> (2017,6,16,アクセス)
- 2) 総務省 (2016) 全国地方公共団体コード.
http://www.soumu.go.jp/main_content/000442938.pdf (2017,6,19,アクセス)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Hiroko Hashimoto, Kumi Takahashi	4. 巻 18
2. 論文標題 Difficulties faced by public health nurses involved in prevention of child abuse	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 JNI : The Journal of Nursing Investigation	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32273/jni.JNI_018_001	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Hiroko Hashimoto, Kumi Takahashi	4. 巻 7
2. 論文標題 Training Needs and Issues Recognized by Public Health Nurses Involved in Prevention of Child Abuse	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 International Journal of Nursing & Clinical Practices	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15344/2394-4978/2020/325	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 橋本浩子, 高橋久美
2. 発表標題 子ども虐待に携わる保健師の困難感と関連要因
3. 学会等名 第66回日本小児保健協会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hiroko Hashimoto, Kumi Takahashi
2. 発表標題 Training needs of public health nurses in dealing with child abuse
3. 学会等名 ISPCAN XXII International Congress on Child Abuse and Neglect (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 橋本浩子, 高橋久美
2. 発表標題 児童虐待に携わる保健師の困難感に関する文献検討
3. 学会等名 第64回日本小児保健協会学術集会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	高橋 久美 (TAKAHASHI Kumi) (40771085)	徳島大学・大学院医歯薬学研究部(医学域)・助教 (16101)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------